



水大学園だより

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <https://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学 生 課

ごあいさつ

理事（水産大学校代表） 三 木 奈都子



みなさま、こんにちは。
令和8年4月より、水産研究・教育機構理事（水産大学校代表）に就任いたしました三木奈都子でございます。日頃より水産大学校の教育・研究活動にあたたかいご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は平成17年より12年間、水産大学校に教員として勤務し、水産流通経営学科において水産経済分野の講義・卒論等を担当して参りました。その後、平成29年の水産大学校と水産研究センターとの組織統合時に、横浜庁舎の中央水産研究所経営経済研究センターに移りました。その後の組織再編により令和2年からは水産技術研究所養殖経営・経済室所属として水産経済研究を続けた後、令和6年から理事となりました。そしてこのたび、代表として水産大学校に戻り、学生・教職員と過ごせる日々を大変嬉しく感じています。

ここからは、本校の近年の状況についてご報告させていただきます。令和7年度の卒業・修了生の就職率は91.8%、そのうち水産業および関連分野への就職率は79.3%でした。企業等の皆様からのご支援に加え、合同企業説明会の実施や教員による企業訪問など本校の地道な積み重ねが実を結んでおります。学生一人ひとりが自身の進路に向き合い、将来への一步を踏み出していく姿に、頼もしさと喜びを感じております。

また入学試験におきましても、令和8年度は本科で3.3倍の倍率を維持し、今年度は本科234名、専攻科50名、水産学研究科7名、合計291名の新生を迎えることができました。教職員による高校訪問やオープンキャンパスなどの取り組みを通じて、本校の魅力が広がっていることを嬉しく思っております。さらに、海技士養成においても、令和7年度の二級海技士筆記試験の合格率は91.8%と、大きな成果を上げることができました。学生たちの日々の努力と、それを支える教育の積み重ねが着実に実を結んでおります。

学内では、講義や実験・実習、卒業研究、乗船実習等の教育活動に加え、クラブ活動や学生自治会、

大学祭、地域ボランティアなど、多彩な活動がコロナ後に徐々に活気を取り戻し、学生の笑顔が戻ってきています。耕洋丸の遠洋航海出航式における伝統のスタンバイ演舞や公開講座の再開などは、学生と地域をつなぐ大切な機会となっております。

また、本校では学びの充実だけでなく、学生一人ひとりの心と体を支える環境づくりにも力を入れております。学校入口近くの「みなと館」に設けられた医務室と学生相談室では看護師や臨床心理士が常駐し、日々の体調管理や心のケアにあたっています。そこには穏やかであたたかな空気が流れており、学生にとって安心できる居場所となっております。

さらに、教育・研究の発展に関わる取組も行っています。本校から誕生したICT活用のベンチャー企業や地域と連携した養殖技術の開発やブランド魚の研究など、本校の活動は教育の枠を超え、社会へ広く貢献しております。国際交流においても、5月の世界海事大学学生ら約40人の本校視察のほか、長年交流を続けている釜慶大学（韓国釜山）には本年10月に教員・学生が訪問し英語での発表を行う予定です。

このように、水産大学校は水産人材の一大育成拠点として、存在しています。そのベースにあるのは、日々の実学を通して築かれた学生と教員の関係と水産大学校を取り巻く豊かな自然環境です。学生が水産業に対して夢と希望を持ち、水産の道へ力強く歩んでいけるよう、教職員一同、学びの内容やサポート体制を工夫し水産教育に取り組んでまいります。皆様におかれましては、今後とも変わらぬご指導とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



最近の話題

着任のご挨拶

海洋生産管理学科 教授 古賀 淳 司



令和7年4月1日付で耕洋丸船長から実習教育センター併任、海洋生産管理学科の教員に配置替えとなりました古賀淳司と申します。

東京水産大学（現在の東京海洋大学品川キャンパス）の出身になります。

水産大学校と東京水産大学は共に農林省水産講習所をルーツとし、学生寮の寮歌の一つである「快鷹丸殉難歌」とその演舞である「スタンバイ」の文化を共有する学校で、水産大学校には非常に親しみを感じております。

平成2年度に水産庁の船舶職員として採用され、その後ほとんどの期間を調査船に配属されてきました。

これまで海洋水産資源開発センター在籍中も含めると、大西洋グリーンランド周辺海域大陸棚斜面域における大型トロール船「深海丸」での資源量調査並びに企業化調査、インド洋での海外まき網漁船「日本丸」による新漁場開発調査、水産庁漁業調査船「開洋丸」「照洋丸」水産研究・教育機構漁業調査船「北光丸」の太平洋や接続する日本海やベーリング海でアカイカ、サケ・マス、サンマ、クロマグロ等の資源調査等、地球規模でいろいろな漁業調査を経験することができました。

調査船に乗船された研究者、また海洋水産資源開発センター在籍中に乗船した専門船の漁業者から多くのことを教えていただきました。このおかげで水産大学校の練習船でマグロはえ縄実習を安全に行うことができました。また研究用のサンプルも先生方の満足される量を得ることができました。

これまで学生と接していると若い人たちの魚離れが言われている中で、同時に就職先もずいぶんと魚離れが進んでいると感じております。日本の漁船が世界の海から閉め出され日本の水産業が北太平洋にほぼ限定される今、学生たちにどのようにして水産業の魅力を伝えていけば良いのか模索中です。

現在は活動の場を練習船から吉見キャンパスにうつっております。水産大学校の学生は皆さん真面目で真剣に学問や実習に取り組んでおられます。これに応えられるよう私も準備していかなければなりません。

「教えるは習うに同じ（教えることは自ら習うこと）」の言葉どおりこれから私自身が勉強です。今後ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

日本設備管理学会 2025 年度
春季研究発表大会における研究科生の
優秀学生発表賞の受賞

海洋機械工学科 教授 太田 博 光

令和7年7月22日～23日に東京都調布市の電気通信大学にて開催された日本設備管理学会 2025 年度 春季研究発表大会において、太田研究室所属の研究科生 森河 実君が優秀学生発表賞を受賞したのでご報告させていただきます。まず日本設備管理学会ですが「設備管理の分野にスポットを当て、ものづくりに関する技術とシステムの革新・創造を行い、これに関わる人材の育成を目的」として、1989年に設立された学会です。設備管理学は身近な学問分野としては、生産工学、設計工学、管理学、環境学、保全工学、経済学、社会学、経営学と深い繋がりがあり、これらの学問分野に関連ある企業や大学の技術者、研究者が所属しています。当方は主に保全工学の面から、機械設備の損傷の未然防止、製品の品質向上と設備保全コストの削減、いわゆる生産効率の向上を状態監視・診断技術の分野から取り組んでいます。さて、今回の春季研究発表大会のテーマですが、「トランプ関税と少子高齢化に打ち克つ、ヒトとAIロボットが調和する設備管理技術」と題しており、トランプ関税に対する製造業の対策や取組み、AIやロボット技術を活用した製造業の省人・省力化の取組みが招待講演や特別講演でも企画されていることが特徴的でした。他に8つのセッションが企画され、計35件の講演が行われました。この中で、大学院の修士課程以上の学生から構成される学生賞のセッションも企画されており、この学生賞のセッションでは15件の講演発表が行われました。学生賞の目的ですが学生が設備管理の分野に興味を持ち、研究を通じて活躍する機会を提供して、特に優秀な



学生の研究を顕彰することにあります。審査方法ですが、講演論文の内容および発表において「研究目的の理解度」「研究の進め方と成果」「スライドの作成発表の仕方」「熱意と創造性」「質疑応答」の5項目を5段階で審査されました。今回学生賞セッションにエントリーした大学は北から北見工業大学、福島大学、電気通信大学、慶応義塾大学、青山学院大学、早稲田大学、東京理科大学、帝京大学、三重大学、名古屋工業大学、香川大学、水産大学校、崇城大学の13の大学でした。審査により高得点を得た上位者より最優秀学生発表賞、優秀学生発表賞、奨励賞が与えられました。太田研究室所属の研究科生 森河 実君も当セッションにエントリーしており、講演論文は「機械診断システム「Wave Diag」と携帯型振動・音響測定装置Type2による低速回転軸受の振動・音響診断」という題目で、船舶に装備されているウィンチや水産機械の攪拌機など低速で回転する機械の損傷を早期に診断可能な手法について論じている内容です。発表ではまずまず首尾よくやっているなという印象でした。審査の結果を聞いて大変驚きました。上から2番目の優秀学生発表賞を頂きました。喜びと同時に森河君には今回の受賞を励みにして、より一層真摯に修士論文に取り組んでもらいたいと思いました。

先端分析化学が紡ぐ、これからの水産科学

食品科学科 准教授 吉 野 敦



本年4月1日付をもちまして、食品科学科に着任いたしました吉野敦と申します。歴史ある水産大学校の一員として、明日の海洋産業を担う若き志を導く大任を拝命し、身の引き締まる思いとともに、新たな挑戦への高揚感を覚えております。

私はこれまで、理学博士として主に天然物有機化学および分析化学の領域に身を置き、約23年間にわたり研究機関や民間企業で先端研究開発の最前線を走ってまいりました。専門は、自然界が創り出す微量な機能性成分を、各種クロマトグラフィー（HPLC/GC）や質量分析計（MS）などの精密機器を駆使して分離・定量し、その構造や有効性を解き明かすことです。これまで、複雑な天然物サンプルの「物質としての解析」を主たる任務としてまいりましたが、これからはその培った技術と職人魂のすべてを、本校における教育と、水産資源の高度利用という新たなフィールドへシフトさせる所存です。

現代の水産業を取り巻く環境は激変しており、資源管理や高付加価値化など、解決すべき課題は山積

しています。これらの課題に対抗するためには、現場の経験則に「科学的なエビデンス」を融合させ、ロジカルにアプローチしていく視点が不可欠です。例えば、地域の海洋資源（海藻類や特産成分など）から機能性素材を抽出し、客観的な数値として品質を完全統制（キャリブレーション）する。こうした「現場からラボ、そして社会へ」という一連のデータ駆動型の思考プロセスを、学生たちに講義や実験を通じて伝承していきたいと考えております。

本校の学生たちと接して強く感じるのは、その旺盛な機動力とフットワークの軽さです。彼らが社会という大海原へ自信を持ってゲートインできるよう、単に知識のインジェクションを行うのではなく、自らの手でデータをサンプリングし、問題の核心をデバッグできる実践的な力を育ててまいります。

最後になりますが、教職員の皆様、学生の皆様、そして地域の皆様との密なコミュニケーションを何よりも大切にしながら、本校の発展に全力を尽くします。新参者ゆえ、至らぬ点多々あるかと存じますが、皆様からの温かいご指導とご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

榎野川河口干潟の再生活動 2026 に参加して

生物生産学科 准教授 南 條 楠 土

令和8年5月2日、山口市秋穂二島の山口湾で開催された「榎野川河口干潟再生活動 2026」に、研究室の学生とともに参加しました。この活動は、榎野川河口域・干潟自然再生協議会をはじめ、行政、漁業者、地域住民、企業、大学などが協力して行っている干潟再生活動です。本校からも例年、生物生産学科の学生を中心に、1年生から4年生まで幅広い学生がボランティアとして参加しています。

榎野川河口の干潟は、アサリやカブトガニをはじめ、多くの生き物が暮らす場所であり、その環境や資源を維持するには継続的な保全活動が欠かせません。この活動では、アサリの稚貝を小さな網袋に入れて保護し、成長した個体をより大きな被覆網の下へ放流する取り組みが続けられています。過年度に



保護されたアサリが成長し、漁獲可能な大きさの個体が確認されており、本活動の積み重ねが少しずつ成果として見え始めていることを実感します。

当日は、多くの参加者がいくつかのグループに分かれ、網袋の開封、アサリの確認・計測・仕分け、被覆網の交換や設置などを行いました。さらに、底質環境を整える耕耘作業や、網に付着したカキ殻・海藻の清掃も行いました。いずれも不安定な泥の上で行う重労働ですが、地域の方々、家族連れ、学生が声をかけ合いながら作業を進める様子は、この活動の大きな特徴だと思います。

この活動では、アサリを守るだけでなく、干潟にすむ生き物を観察する機会も設けられています。小さな子どもたちがカブトガニの幼生や干潟の生き物を観察する姿から、こうした取り組みが次世代への環境学習の場にもなっていることが伝わってきます。学生にとっても、講義で学ぶ「干潟生態系」や「生物多様性」を、現場の泥の感触や生き物の姿、作業の大変さと結びつけて理解する貴重な機会になっています。

また、活動の前には、榎野川流域で採れる山菜の天ぷらや鮎飯などを味わう機会もありました。森や川の恵みが海へとつながり、干潟の生き物を育むという流域全体のつながりを感じられる点も、この活動の魅力です。干潟の資源を守り、育て、利用する過程を地域の方々と共有できることは、学生にとって重要な経験です。

多様な主体が連携し、これほど長く続いている干潟再生活動は、決して多くありません。私も協議会委員として関わるなかで、地域の自然を守るには、多くの人が少しずつ関わり続けることが大切だと感じています。今後も学生とともに参加し、榎野川河口干潟の保全と再生に少しでも貢献していきたいと思っています。

着任のご挨拶

水産流通経営学科 助教 佐々木 稔 基

本年度4月より、水産流通経営学科（流通経営講座）の助教に着任いたしました佐々木稔基（ささき としき）と申します。

私は宮城県南三陸町の出身です。三陸沿岸南部に位置する南三陸町はワカメ、カキ、ホタテ、ギンザケな

どの養殖が盛んな町で、国内有数の港町である気仙沼市と石巻市の中間に位置しています。また、家族や親類の多くが漁業や関連産業に従事しており、そのような環境で育ったことが、水産経済学を学ぶ大きなきっかけとなりました。

就職後は民間コンサルタント会社等を経て、本年3月まで東京都の全国漁業共済組合連合会に勤務し、長年にわたり漁業共済および積立ぶらすの事業に携わってまいりました。

一方で、業務の傍ら研究活動にも取り組んできました。研究テーマは、国産養殖ワカメの生産・加工販売・消費に関するもので、1990年代半ば以降、中国産養殖ワカメ・メカブが国内市場で大きなシェアを占める中、国内主産地がどのような対応を行うことで国産ワカメ・メカブ商品の販売を維持し、産地として存続してきたのかを明らかにしました。その成果を論文としてまとめ、昨年9月に博士の学位を取得することができました。

その後、水産大学校の教員公募に応募し、ご縁をいただいて着任することとなりました。講義や学生指導など、これまで経験のなかった業務も多く、戸惑うこともあります。すべてが新鮮で楽しく仕事をさせていただいております。

また、神奈川県に家族を残しての単身赴任生活となりました。寂しさを感じることもありますが、家族や周囲の方々の支えに感謝しながら、新たな環境での生活を送っております。

現在は3年生を対象とした「水産地域振興論」を担当しております。教員としてはまだ駆け出しではありますが、学生一人ひとりの個性や主体性を尊重しながら、さらに講義やゼミ活動を通じてともに学び、学生から信頼される教育者となれるよう努力してまいります。また、漁村の活性化をはじめ、水産業の再生や地域振興に資する調査研究を行い、その成果を地域に還元できるように取り組んでまいります。

まだまだ至らぬ点はございますが、大学校の皆様方のご指導を賜りながら、日々の教育・研究活動に精一杯励んでまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



在校生の声

幼い頃からの夢を叶える。

海洋生産管理学科1年 寶 金 劉希娃

水産大学校に入学して3ヵ月が経ちました。北海道からここ下関に来るという大きな不安を抱えながら、私の新生活は始まりました。吉見の環境は私の故郷と少し似ており自然豊かでのどかな町です。漁師の家庭で育った私は物心ついた頃から

海が身近にあり、海に関わる仕事に携わりたいという思いから航海士を志してきました。今年度は幅広い水産の知識をつけるための講義が多く、自分の知らない知識や技術を日々学びながらの学生生活を送っています。年次が上がるにつれて、船舶運用についての専門科目が入り内容が難しくなると思いますが、自分の夢を叶えるためにも頑張りたいと思っています。

私生活では大学生になり、ランニングが日課に

なりました。講義が終わった後ほとんど毎日友人とランニングをしています。それが影響して11月のフルマラソンで走りきることが自分の目標になりました。また、資格取得も今年度の目標です。学校での学びはもちろん大切ですが、友人と過ごし何かに夢中になる時間というのはかけがえのない物だと私は思っています。この水産大学校では4年もしくは5年後の自分を想像しながら、仲間と切磋琢磨し人間的に成長できたと思えるような生活を過ごしていこうと思います。

水産大学校に入学して

海洋機械工学科2年 小木曾 普 二

私の名前は小木曾普二です。出身は静岡県立焼津水産高等学校です。私は、本校に入学して得た経験と今後頑張っていきたいことが数多くあります。初めに私は、本校に入学して、高校時代と比べて設備の規模の大きさに驚きました。大学であるため、当然と言ってしまうとそれまでですが、実験棟や講義棟を見て、これから始まる実習や講義への期待が膨らんだことを覚えています。

次に、講義内容の難しさと友達の大切さについてです。私は、水産高校時代、専門科目等の兼ね合いもあり、数学や英語の理解が浅いまま本校へ入学しました。そのため、英語や数学科目ではかなり苦労しました。しかし、寮の友達に丁寧に教えていただいたことで、なんとか単位を取得することができました。このことから私は、仲間を作ることの大切さを学びました。

最後に、私は遠洋航海実習へ向けて頑張っています。高校時代に乗船していた練習船「やいづ」では、一本釣り漁法にてカツオ、マグロ操業を行いました。そのため、本校実習船「耕洋丸」、「天鷹丸」で行われる延縄漁法でのマグロ操業は経験したことがありません。一本釣り漁法と延縄漁法の違いを実際の経験をもとに肌で感じて比較してみたいと思います。

乗船実習を終えて

食品科学科3年 村 田 樹 香

3年生に進級して間もない4月、私たちは耕洋丸に乗船し、1週間の乗船実習へ参加しました。実習ではトロール漁で獲れた魚の選別作業、魚を捌いてみりん干やみそ漬けを作る加工実習、普段の釣り竿とは異なる方法で行うイカ釣り実習など、多くの実践的な体験をしました。どの活動も興味深く、海や釣りへの関心が高まるきっかけとなりました。

実習期間中は海が荒れ、予定通りにトロール漁を実施することができなかったり、立っていることも難しいほど船が大きく揺れたりするなど、自然の厳しさや難しさも身をもって実感しました。

また、船上では電波が届かない環境であったため、空き時間には学生同士で集まり、トランプなどをして交流を深めました。同じ学科の仲間との距離

が縮まり、共同生活を通して協調性や思いやりの大切さも学ぶことができました。

今回の実習は、私にとっての初めての挑戦であり、多くの学びを得る貴重な経験となりました。食品に関する知識だけでなく、航海や船の運航についてなども教わり、普段の大学生活では経験できない学びを得ることができました。乗船実習で得た知識や経験、人とのつながりを大切に、今後の学習や将来に活かしていきたいと思っています。

心機一転

生物生産学科1年 紺 野 生 喜

私は一度別の大学へ進学しましたが、自分の学びたいことは何かを改めて考え、この水産大学校への進学を決めました。当時は不安もありましたが、今ではこの選択は間違っていなかったと自信を持って言えます。

周りとは少し年齢が離れたスタートとなりました。周囲になじめるか、先輩方との関係はうまくいくかなど心配事もありましたが、あることを大切にしていたことで、そのような不安も次第なくなりました。それは、挨拶です。

私は寮で生活していますが、すれ違う際には相手にしっかりと伝わる声で挨拶をすることを心がけました。その積み重ねによって、良好な関係を築くことができたと思っています。

また、そのようにして築いた人とのつながりは、実習の場でも役立っていると感じています。水産大学校では実習の機会が多くあります。私は生物生産学科ですが、前期のうちにすでに一回目の実習を経験しました。講義で学ぶだけでなく、実際に自然と向き合い、仲間と協力しながら取り組む実習は非常に学ぶことが多く、大きな刺激となっています。日頃から交わっている挨拶が円滑なコミュニケーションの第一歩になっていることを実感しました。

これからも多くの経験を積みながら、自分のやりたいことを見つけ、学びを深めていきたいと思っています。

水産業との「つながり」を広げた 学生生活

水産流通経営学科3年 前 川 大 成

私は水産大学校に入学してから、水産業について多くのことを学んできました。3年生となった現在は、授業や実習だけでなく、自ら水産業の現場に足を運び、水産業の実務に触れることを意識して生活しています。

その一つが、本校の教員から紹介していただいた牡蠣小屋でのアルバイトです。この牡蠣小屋では、牡蠣の販売や接客だけでなく、生産者や水産関係者の方々と関わる機会も多くあります。近年注目されている「6次産業化」の現場を体験することができ、生産だけでなく加工や販売まで含めた水産業の在り方について学ぶ貴重な経験となっています。また、

現場で働く中で、水産業を支える多くの人々の努力や工夫を知り、大学で学んでいる内容との「つながり」を実感することができました。

さらに、私はこうした機会を受け身で終わらせるのではなく、自分から積極的に人との「つながり」を広げることを心掛けています。アルバイト先や学外の活動を通じて様々な方と交流する中で、水産業には多様な働き方や可能性があることを知り、自身の視野を広げることができました。

今年はいよいよ就職活動が本格化し、卒業後の進路について考える機会も増えていきます。これまで大学で学んだ知識や現場で得た経験、人との「つながり」を大切にしながら、自分らしい進路を見つけていきたいと考えています。残りの学生生活も、一つ一つの経験を成長に繋げられるよう努力していきたいと思います。

研究科に進学して

水産学研究科2年 水産技術管理学専攻
機関工学専攻分野 石川 翔 己

私は海洋機械工学科を卒業後、水産学研究科へと進学し、徳永先生のご指導の元で病魚を早期発見するスマートセンサーの開発を目指し、日々研究を行っています。研究を行おうと思ったきっかけの1つとして、魚を飼育している友人が、ただで魚の病気や異常を早期に発見していることにすごく関心を持ったという出来事があります。当時は、関心と

いった気持ちが大きかったですが、研究室に所属になり、AI技術について知識を深め、AIを用いて友人のように魚の異常を発見するような研究ができなかと考えました。様々な水産業の問題を調べていくうちに、養殖業での魚病問題について耳にしました。養殖業でも、目視による病魚の発見を行っており、少子高齢化による人手不足が問題となっています。そこで、これをAIを用いて自動化・補助できるようなスマートセンサーの開発を目指そうと思いました。

研究室では、病気の兆候を把握するためには魚の行動データを取得することが重要であると考えました。そのため、実験をどのように行うか、また動きのデータをどのように取得するかについて、指導教員の徳永先生や研究室の後輩たちと議論を重ねながら、実験環境の構築を進めました。実験では、魚の動画像データを3日間取得することに成功しました。現在は、実験によって得られた動画像データから、魚の動きを取得するために、AIを用いて座標データの取得や、病気の魚、健康な魚で速度や加速度の算出・比較を行い、定量的な数値の違いを発見している最中です。きっかけは些細なことでも、自分のしてみたい研究を伝えてみると、先生方はきっと親身になって、お話を聞いてくださいます。なので、気になっている研究室や研究内容があったら、ぜひ先生方に相談して、研究科という道も視野に入れてみてほしいと思います。

クラブ紹介

水産大学校カッター部の活動

男子カッター部主将 内田 航太郎 (F3)
女子カッター部主将 宮丸 陽名 (S2)

水産大学校カッター部は、男子部43名、女子部19名(7月現在)により、それぞれ大学前面海域の吉見湾で活動しています。大学におけるカッター競技は、一般:9mカッター・12人漕ぎ(2,000m)、女子:6mカッター6人漕(1,000m)でタイムを競います。洋上での安定性を確保するために艇は強固に作られている反面重量があり、またオール操作は体力的に厳しいこともありますが、「チームワーク」とともに「声出し」「盛り上がり」を大切にして活気を持って活動しています。

カッター部の活動は、大会への出場や公式戦の開催担当ばかりでなく、地域に根ざした活動も大切に行っています。今年、第12回大会となる「下関カッターレース」(下関漁港)の大会運営に第1回大会から協力するとともに、地元の吉見小学校児童を対象としたカッター講習、地域の祭りへの協力

なども積極的に行なっています。

現在、11月初旬に長崎県時津町大村湾で開催予定の「第72回西日本新人カッター競技大会」(主管:長崎大学カッター部)を見据え、上級生の指導の下で1年生が日々練習に励んでいます。今年は男女ともに多くの1年生の入部が見られたことから、秋までにベストタイムを出し、それぞれ新人戦の優勝を目指します。さらに、部一丸となって、「全日本カッター競技大会優勝」という目標に向かって全力で練習に励む次第です。



学生部だより

令和7年度における就職対策と
進路状況について

学生部長(就職対策検討委員長) 大 原 順 一

本校では就職対策検討委員会を設置して、学生課就職支援室の就職統括役を中心に学生への就職支援を行っています。

就職対策に関する主な活動は、(1) 3年生を主に対象とした自己分析・自己発見のための職務適性テストの実施、(2) 就職活動の専門講師やその他様々な分野で活躍されている講師を招いた就職ガイダンスの開催、(3) 就職手引き書「就活支援ブックー就職活動編ー」を3年生全員に配布し、これを用いた就職指導、(4) 企業等の採用情報の把握、(5) 企業研究会・説明会の開催、(6) 就職活動を行う際のキャリアカウンセリング、(7) 本校の就職支援ツールであるキャリアタス UC の活用等です。

令和7年度は、合同企業説明会を Web で開催し、129 社に参加頂きました。また、水産及び関連分野の業界や企業の理解を深めることを目的として、キ

ャリア教育の一環として実施している企業研究会・説明会を対面で31件実施するとともに、学生がキャリアタス UC にアクセスして、就職支援情報の提供、水産系企業の求人票や企業情報の閲覧、インターンシップの検索等に活用しました。さらに、採用時に Web 面接が導入されている背景から、Web 面接専用のブースを学内に設けるなど環境面でも配慮を継続しました。これらの活動の結果、令和7年度卒業・修了者の就職希望者153名(本科94名、専攻科52名、研究科7名)の就職率は98.0%(前年度は98.7%)で、このうち水産関連分野への就職率が79.3%(前年度は86.3%)と高い割合で維持しています。

インターンシップは令和5年から大きく制度が変わり、就業体験が重要視されるだけでなく、インターンシップに参加した学生情報を企業側が採用選考活動に使用できるようになります。本校では引き続き、多様な採用に関する情報を収集し、学生の就職活動が円滑に行えるように必要な支援を実施してまいります。

令和7年度 卒業・修了者の進路状況

令和8年3月31日現在

本 科 専攻科 研究科	修 卒 了 業 者 及 数 び	進 学							就 職 試 験 準 備 希 望 者 数 ②	就 職											進 路 未 定 者 数	就職率(%)			
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	専 攻 科 等 学	研 究 生 等	進 学 者 合 計	水 産 関 連 分 野								小 計 ③	そ の 他 分 野	内 定 者 合 計 ①	水産関連分野			全 体 就 職 率			
								国 家 公 務 員		地 方 公 務 員	各 種 団 体	養 殖 業・ 漁 業	水 産 加 工	水 産 流 通	調 査 開 発 等				資 材 給 付 等	者 就 職 希 望 ③/②			者 就 職 希 望 ③/①	①/②	
水 産 流 通 科	男	11	0	0	0	0	0	0	11	0	1	0	1	3	5	0	0	10	1	11	0	90.9	90.9	100.0	
	女	5	1	0	0	0	1	0	4	0	0	1	0	0	1	0	1	3	1	4	0	75.0	75.0	100.0	
海 洋 生 産 科	男	16	1	0	0	0	1	0	15	0	1	1	1	3	6	0	1	13	2	15	0	86.7	86.7	100.0	
	女	39	0	2	25	0	0	27	1	11	0	0	1	0	5	0	3	9	2	11	0	81.8	81.8	100.0	
海 管 理 学 科	男	5	0	0	2	0	0	2	0	3	1	0	0	0	1	0	1	3	0	3	0	100.0	100.0	100.0	
	女	44	0	2	27	0	0	29	1	14	1	0	1	0	6	0	4	12	2	14	0	85.7	85.7	100.0	
海 洋 機 械 科	男	36	5	2	19	0	0	26	1	9	0	1	1	0	0	0	6	8	1	9	0	88.9	88.9	100.0	
	女	4	1	0	1	0	0	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	100.0	100.0	100.0	
食 品 科 学 科	男	40	6	2	20	0	0	28	2	10	0	1	2	0	0	0	6	9	1	10	0	90.0	90.0	100.0	
	女	21	3	1	0	0	0	4	0	17	1	1	0	0	5	2	2	1	12	3	15	2	70.6	80.0	88.2
生 物 生 産 学 科	男	16	2	0	0	0	0	2	0	14	0	0	0	0	9	2	1	0	12	2	14	0	85.7	85.7	100.0
	女	37	5	1	0	0	0	6	0	31	1	1	0	0	14	4	3	1	24	5	29	2	77.4	82.8	93.5
計	男	18	1	0	0	0	0	1	0	17	0	4	3	0	0	3	3	16	1	17	0	94.1	94.1	100.0	
	女	9	2	0	0	0	0	2	0	7	0	1	0	0	2	1	2	6	1	7	0	85.7	85.7	100.0	
計	男	27	3	0	0	0	0	3	0	24	0	5	3	0	0	5	4	5	22	2	24	0	91.7	91.7	100.0
	女	125	9	5	44	0	0	58	2	65	1	7	5	1	8	15	5	13	55	8	63	2	84.6	87.3	96.9
専 攻 科 船舶運航課程	男	39	6	0	3	0	0	9	1	29	1	1	2	0	9	6	2	4	25	4	29	0	86.2	86.2	100.0
	女	164	15	5	47	0	0	67	3	94	2	8	7	1	17	21	7	17	80	12	92	2	85.1	87.0	97.9
専 攻 科 船舶用機関課程	男	24	0	0	0	0	0	0	24	1	0	1	1	0	9	1	1	14	9	23	1	58.3	60.9	95.8	
	女	3	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	1	0	1	3	0	3	0	100.0	100.0	100.0	
計	男	27	0	0	0	0	0	0	27	1	0	2	1	0	10	1	2	17	9	26	1	63.0	65.4	96.3	
	女	25	0	0	0	0	0	0	25	1	0	0	0	0	12	1	2	16	9	25	0	64.0	64.0	100.0	
計	男	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	—	—	
	女	25	0	0	0	0	0	0	25	1	0	0	0	0	12	1	2	16	9	25	0	64.0	64.0	100.0	
計	男	49	0	0	0	0	0	0	49	2	0	1	1	0	21	2	3	30	18	48	1	61.2	62.5	98.0	
	女	3	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	1	0	1	3	0	3	0	100.0	100.0	100.0	
計	男	52	0	0	0	0	0	0	52	2	0	2	1	0	22	2	4	33	18	51	1	63.5	64.7	98.1	
	女	7	0	0	0	0	0	0	7	0	2	0	0	0	1	1	1	6	1	7	0	85.7	85.7	100.0	
計	男	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	—	—	
	女	7	0	0	0	0	0	0	7	0	2	0	0	0	1	1	1	6	1	7	0	85.7	85.7	100.0	
計	男	181	9	5	44	0	0	58	2	121	3	9	6	2	9	37	8	17	91	27	118	3	75.2	77.1	97.5
	女	42	6	0	3	0	0	9	1	32	1	1	3	0	9	7	2	5	28	4	32	0	87.5	87.5	100.0
計	男	223	15	5	47	0	0	67	3	153	4	10	9	2	18	44	10	22	119	31	150	3	77.8	79.3	98.0
	女	223	15	5	47	0	0	67	3	153	4	10	9	2	18	44	10	22	119	31	150	3	77.8	79.3	98.0

※ 9月卒業含む

【就職先の分類】

水産関連分野

各 種 団 体：水産に関する団体（漁業、流通、船舶等関係団体）

漁 業・養 殖 業：水産動植物の採捕又は養殖の事業者

水 産 加 工：水産動植物を原料又は材料として、食料、肥料その他の有用物を生産する事業者

そ の 他：水産業関連分野以外の公務員・団体・企業など

水 産 流 通：水産物の貯蔵、運搬、販売等の流通に関する事業者

調 査 開 発 等：海洋水産関連の調査会社

資 機 材 供 給 等：水産業やそのサービス部門等に資機材供給等を行う関連事業者

令和7年度卒業生進学・就職状況一覧表

令和8年3月31日現在

◎進 学（大学院等）	各種団体		
北海道大学大学院	（国研）水産研究・教育機構	旭洋造船(株)	東洋建設(株)
東京海洋大学大学院	（国研）水産研究・教育機構（船舶）	(株)九十九島グループ	(株)東洋信号通信社
神戸大学大学院	全国漁業協同組合連合会	栗林マリタイム(株)	東洋冷蔵(株)
奈良先端科学技術大学院	日本かつお・まぐろ漁業協同組合	(株)グローバルオーシャンディベロップメント	内海造船(株)
九州大学大学院	日本小型船舶検査機構	ケイコン(株)	中川食品(株)
九州大学農学研究院	（一財）日本食品検査	ケイラインローローバルクシップマネージメント(株)	日水物流(株)
九州工業大学大学院	（一財）日本食品分析センター	(株)ココスジャパン	日本郵船(株)
佐賀大学大学院	（一社）日本油料検定協会	(株)五省コンサルタント	日本無線(株)
鹿児島大学大学院	兵庫県漁業協同組合連合会	(株)三共物商	(株)はま寿司
		(株)三協デリカ	林兼産業(株)
◎就 職	民間企業	自営業（家業：漁業）	(株) PARCO
官公庁	旭海運(株)	四国旅客鉄道(株)	阪九フェリー(株)
水産庁	旭化成(株)	(株)シモセン	(株) BML フード・サイエンス
水産庁（船舶）	(株)あじかん	下関酒造(株)	(株) FIRst Drop
防衛省（海上自衛隊）	アドバンテック(株)	(株)ジャパンシーフーズ	フィード・ワン(株)
国税庁（福岡国税局）	飯野海運(株)	商船三井テクノトレード(株)	(株)福岡魚市場
国土交通省（船舶系技術職）	イオンフードサプライ(株)	(株)商船三井	プライムプラネットエナジー&ソリューションズ(株)
厚生労働省（労働基準監督署）	池田糖化工業(株)	(株)商船三井さんふらわあ	(株)前川製作所
北海道	一正蒲鉾(株)	昭和日タンマリマイム(株)	マリンフーズ(株)
千葉県	(株)伊東園ホテルズ	(株)ショクリュー	マルエーフェリー(株)
広島県	(株)うおいち	新日本海フェリー(株)	丸紅シーフーズ(株)
山口県	(株)魚力	(株)森林コンサルタント	三浦工業(株)
佐賀県	NS ユナイテッド海運(株)	第一中央汽船(株)	美須賀海運(株)
大分県	ENEOS オーシャン(株)	(株)ダイニチ	三角商事(株)
宮崎県	MU アークライン(株)	大四マリン(株)	(株)ミツカン
宮崎市	大口水産(株)	太平洋沿海汽船(株)	三菱鉱石輸送(株)
	(株)大島造船所	(株)タイムレス	ヤマエグループホールディングス(株)
	オーシャントランス(株)	(株)タカミヤ	(株)山口油屋福太郎
	海洋技術開発(株)	(株)田村ビルズグループ	郵船クルーズ(株)
	(株)環境総合リサーチ	中央魚類(株)	郵船商事(株)
	キスコフーズ(株)	中電技術コンサルタント(株)	ラッキーコーヒーマシン(株)
	九星飲料工業(株)	(株)辻野	
	共同船舶(株)	テクノプロ・エンジニアリング社	
	(株)極洋	東海澱粉(株)	五十音順

令和8年度入試状況

本校の令和8年度入試状況をお知らせします。昨年11月に実施した学校推薦型選抜には、全学科で121名（前年度146名）の応募があり、また、今年2月に実施した一般選抜には全学科で493名（前年度457名）の応募があり、推薦と一般の合計で614名の志願者数となりました。

学科別応募状況は、水産流通経営学科36名（募集人員20名に対する倍率1.8倍）、海洋生産管理学科149名（募集人員45名に対する倍率3.3倍）、海洋機械工学科75名（募集人員45名に対する倍率1.7倍）、食品科学科76名（募集人員45名に対する倍率1.7倍）、生物生産学科278名（募集人員30名に対する倍率9.3倍）でした。全体では614名（募集

人員185名に対する倍率3.3倍）、前年度（令和7年度）入試の志願者数603名（3.3倍）から11名の増加となりました。

令和7年度の西日本を中心とした高校訪問については、対象としたほとんどの高校を直接訪問して本校の紹介などができました。また、昨年度のオープンキャンパスは、8月23日と24日に、参加者数を増やして校内で実施しました。たいへん盛況で本校の魅力を十分に知っていただいたと実感できました。

今年度も引き続き、受験生確保のための活動として高校訪問やオープンキャンパスなどへ積極的に取り組むことで、水産学を学ぶ意欲の高い、多くの高校生に志願して頂けるよう努力して参ります。